

論 文

# 障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者の イメージと日常生活における意識・態度

An Analysis of the Image and the Consciousness/Attitude  
on the Mental Retardation through Sports Volunteer for the Disabilities

松 本 耕 二  
Koji MATSUMOTO  
田 引 俊 和  
Toshikazu TABIKI

## I. はじめに

知的障害者権利宣言（1971）や国際障害者年（1981）などを契機として、障害の有無に関わらず全ての人たちが社会の一員として同じ場で存在することを指すインテグレーションやインクルージョンといった障害者福祉の基本的な理念、さらには地域で自立した社会生活を送ることができるコミュニティ・ケアや知的障がい者の社会参加が重視され、社会全体に理解や援助などの認識が芽生えてきた。障害者福祉を進展させるための諸施策が次々と示され、その基本計画では、障害のある人も対等な社会の一員として人権を尊重し、自己選択と自己決定に基づき社会活動に参加することができる社会の実現を目指していくことが示されている（総理府：1995、内閣府：2003）。知的障がい者が地域社会で自立して生活するということは、知的障がい者自身にとっての生活環境の変化という側面だけでなく、従来の福祉施設中心の対人関係からの転換も図らねばならない。知的障がい者が地域の社会資源などさまざまなサポートを利用するなどして一市民として暮らしていく上では、これまで以上に多くの人々の理解と支援が必要なことは明らかである。

障害者に関する世論調査（内閣府：2007）の結果をみると、差別や偏見の有無は「あると思う」とするが82.9%、また障害のある・なしにかかわ

らず誰もが社会の一員としてお互いを尊重し支え合って暮らすことを目指す「共生社会」という言葉を「知っている」が40.2%と、制度・政策面では整備が進んできてはいるものの依然として差別や偏見が存在している実情がある。障がい者の社会参加を拒む「障害」には、物理的な障壁、制度的な障壁、文化情動的な障壁、意識の上での障壁が存在する（総理府：1995）といわれるが、障がい者への差別や偏見をも含む「意識の上での障壁」は制度や法律の整備だけで容易に取り除かれるものではない。

翻って、障がい者のスポーツは、パラリンピックや全国障害者スポーツ大会、また知的障がい者に限ってはスペシャルオリンピックス世界大会（2005）が長野で開催されるなど、多くの人々にその活躍や営みが認知されつつある。しかし、実際の地域における障がい者スポーツの活動は、サポートが必須となる場面が多いにもかかわらず、施設スタッフなど業務に関係する福祉関係者への依存が強い。これは障がい者と地域とを繋ぐ組織や制度等が十分に機能していないことに加え、人・物的不足、障がい者の情報、また理解不足が意識面の障壁となってボランティアの積極的、主体的な参加が望まれにくい状況にもあることにも由来しているのではないだろうか。このような地域における障がい者スポーツ振興は、障がい者自身が

社会参加の一步を踏み出す場の創出と、共に暮らす地域の人々があるまま実物大の障がい者に接し、知り、ふれあえる場である、ささえるスポーツ活動への参加によって障がい者を理解・受容する好機とすることである。

国内の知的障がい者に対する態度やイメージ研究では接触経験や関わりの度合い、知識等、多角的な分析が行われ、多くの知見（生川：1998、松村ら：2002ほか）が得られている。また障がい者に対する態度および意識とボランティア活動との関係について桐原（1999）がボランティア活動への動機と障がい者に対する態度分析を行ない、主体的動機によるボランティア活動への参加は障がい者への情緒的理解を促したことを報告している。同様にボランティア経験のある学生は障がい者への関わりについて好意的な結果（生川・安河内：1992、中村・川野：2002、山口・吉武：2005）であることが報告され活動参加による肯定的な意識が生起することが明らかにされている。知的障がい者に対する態度変容については、実習（田中・須河内：2004、守屋：2003）などを通じた障がい者との交流（大谷：2002、川間：1996）が、ポジティブイメージへ変化することが報告され、さらに接触経験の質の重要性を説いている。さらに接触経験に加えて適切な知識が態度形成に影響を与えていることにも言及し、いずれの研究においても、社会全体の人々の、障害がある人々に対する態度は、接触経験があると概ね肯定的、好意的に変容するという内容であり、地域の人々との交流の場の創出がノーマライゼーション理念の推進や共生社会の実現に役立つ結果を示唆している。

地域スポーツなどイベントと通じた交流や日常的な障がい者スポーツの振興は、より多くの人びとのボランティア活動参加が真の共生社会を目指す上で障がい者に対する否定的な意識や態度といった障壁を低減させることに資すると思われる。そこで本研究では、障がい者のスポーツ活動をささえるボランティアの知的障がい者に対するイメージと意識・態度の構造と、障がい者に対す

る意識・態度に関連するイメージを明らかにしたので報告したい。

この度は、地域で日常的にスポーツ活動をとるボランティアと一過的に障がい者スポーツイベントをサポートするボランティアの活動参与形態別の相違に着目して分析した。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象と方法

調査は、「第4回スペシャルオリンピックス日本・夏季ナショナルゲーム・熊本」（2006年11月3～5日）に参加したボランティアに調査票を用いて実施した。調査対象であるボランティアは、知的障がいのある選手（以下、アスリート<sup>1</sup>）を地域で日常的に関わり大会に引率した各都道府県選手団のコーチ・ボランティア（以下、コーチ）と、今大会開催のために熊本県内各所で大会の運営を支援したボランティア（以下、イベントスタッフ）で構成されている。

調査対象者であるボランティアへの調査票の配布は、大会にエントリーされたコーチ560人とイベントスタッフ1000人に、同じ内容の無記名票を大会期間中に大会実行委員会を通じて配布し、返信用封筒による郵送法により回収した。回収期間は、大会終了直後から2006年11月24までの20日間とした。

その結果、得られた有効回答は、コーチ 257名、イベントスタッフ 116名の373（回収率23.9%）であった。

### 2. 調査内容

障がい者スポーツの活動に参加するボランティアの知的障がい者に対する意識を測定するためには適切な態度測定尺度を用いる必要があるが、知的障がい者に対する態度測定尺度については現在のところ継続検討を要する段階でしかない（生川：1998、2007）。そのため本研究では、知的障がい者に対するイメージに関する項目は、先行研究（松村ら：2002、田中ら：2004）を参考に20項目の質問を設定した。設問の回答には「非常にそう思う」

「まあそう思う」「どちらともいえない」「まあそう思う」「非常にそう思う」の5段階尺度によるSD法を用いてそれぞれに得点を与えた。回答の偏りへの影響を避けるため、形容詞対質問項目のいくつかにおいて評価の方向を左右入れ替えて配置した。また、知的障がい者に対する日常生活上での態度や意識（障がい者観）に関する項目は、徳田（1990）、生川ら（1992）の先行研究をもとに一部質問語句を変更して15項目を、さらに本研究に関係のある3項目を新たに追加し計18項目で構成している。これらの評価は「非常にあてはまる（5点）」「まああてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「まったくあてはまらない（1点）」の5段階尺度を用いてそれぞれに得点を与えて分析を試みた。

### 3. 分析方法と枠組み

障がい者スポーツをささえるボランティアの知的障がい者に対するイメージおよび意識・態度の構造を把握するために、イメージS

D項目および日常生活上の意識・態度に関する項目の因子分析（因子負荷量0.45以上）を行い、抽出された各因子とボランティア参与形態の別（コーチとイベントスタッフ）による比較（t検定）を試みた。さらに意識・態度に影響を及ぼすイメージを把握するために、各意識因子とごとにイメージ因子を説明変数とした重回帰分析を施し、その関係性について確認した。



図1 ボランティアの種類と役割

表1 研究方法

調査対象	第4回スペシャルオリンピックス日本・夏季ナショナルゲーム・熊本（2006年11月3～5日）の大会に参加したボランティア 各地区組織選手団コーチ（560人・悉皆） イベントボランティア（1000人・集合配布）	
調査方法	質問紙の留置（配布）および郵送（回収）（2006/11/3～11/24までの20日間）	
調査内容	<p><u>ボランティア活動要因</u> （日常活動歴、活動頻度、活動内容など）</p> <p><u>活動意識要因</u> （参加動機、活動満足度、継続意欲、コミットメント、バーンアウト、イメージ、態度・意識・障害者観など）</p> <p><u>個人的属性要因</u> （性別、年齢、職業、障害者との接触頻度など）</p>	<p><u>障害者に対するイメージ</u>（20項目） 先行研究（松村ら：2002、田中ら：2004）をもとに作成（SD法・5段階尺度）。</p> <p><u>意識・態度</u>（18項目） 先行研究（生川ら：1992、徳田：1990）をもとに日常的な場面を想定し、5段階尺度で測定。</p>
回収	有効回答 373名（コーチ 257名、イベント 116名）（有効回答率23.9%）	
分析	因子分析：イメージ、意識・態度 重回帰分析：（意識・態度に及ぼすイメージ）	

表2 サンプルの属性

項目	全 体		イベントスタッフ		コーチ		p.
	N <sup>1)</sup>	%	n	%	n	%	
性 別	336						
男性	197	58.6	54	47.8	143	<u>64.1</u>	8.253
女性	139	41.4	59	<u>52.2</u>	80	35.9	**
年 齢	324		42.62歳		45.18歳		n.s
10歳代	9	28.0	6	5.6	3	1.4	14.755
20歳代	42	13.0	9	8.4	33	15.2	*
30歳代	66	20.4	26	<u>24.3</u>	40	18.4	
40歳代	79	24.4	33	<u>30.8</u>	46	<u>21.2</u>	
50歳代	83	25.6	20	18.7	63	<u>29.0</u>	
60歳代	40	12.3	11	10.3	29	13.4	
70歳代	5	1.5	2	1.9	3	1.4	
婚 姻	330						
未婚	105	31.8	33	30.0	72	32.7	0.251
既婚	225	68.2	77	70.0	148	67.3	n.s.
職 業	337						
会社員	134	39.8	57	<u>49.6</u>	77	<u>34.7</u>	23.326
団体職員	18	5.3	3	2.6	15	6.8	**
公務員	32	9.5	4	3.5	28	<u>12.6</u>	
自営業	28	8.3	8	7.0	20	9.0	
主婦	19	5.6	10	8.7	9	4.1	
学生	26	7.7	13	<u>11.3</u>	13	5.9	
パートタイム・アルバイト	25	7.4	8	7.0	17	7.7	
無職	30	8.9	6	5.2	24	<u>10.8</u>	
その他	25	7.4	6	5.2	19	8.6	

※ \*p.&lt;.05, \*\*p.&lt;.01 \*\*\*p.&lt;.001

1) 欠損値があるため総数は異なる

### Ⅲ. 結果

#### 1. サンプルの属性とボランティア活動頻度

本研究でのサンプルの属性は表2に示したとおりである。性別は男性が197人(58.6%)、女性が139人(41.4%)であった。活動参与形態別にみると、イベントスタッフでは女性(52.2%)が、コーチでは男性(64.1%)の割合が高かった。年齢は30歳代から50歳代で全体の7割を占め、イベントスタッフは40歳代、30歳代、コーチでは50歳代、40歳代の割合高かった。職業は、会社員が最も多く(39.8%)、イベントスタッフは、会社員(49.6%)、

ついで学生(11.3%)が多い。コーチでは、会社員(34.7%)、公務員(12.6%)、無職(10.8%)の順に多くみられた。

また、サンプルのこれまでのボランティア活動頻度を表3示している。今回も含めボランティア活動頻度をみると、イベントスタッフは初参加(23.7%)と年に数回(52.6%)とで8割弱を占める。コーチでは、週1回(44.8%)と月に1-2回(29.6%)とで7割強を占めている。活動期間では、始めたばかり(25.9%)の割合が最も多く、他方コーチでは1-3年(33.8%)が最も多く活動経歴が

表3 サンプルのボランティア活動頻度

項目	全 体		イベントスタッフ		コーチ		p.
	N <sup>1)</sup>	%	n	%	n	%	
ボランティア活動頻度	337						
今回が初めて	28	8.3	27	<u>23.7</u>	1	0.4	211.819
年に数回くらい	64	19.0	60	<u>52.6</u>	4	1.8	***
月に1-2回くらい	81	24.0	15	13.2	66	<u>29.6</u>	
週に1回くらい	109	32.3	9	7.9	100	<u>44.8</u>	
週に2-3回くらい	42	12.5	2	1.8	40	17.9	
ほとんど毎日	13	3.9	1	0.9	12	5.4	
ボランティア活動期間	334						
始めたばかり	32	9.6	29	<u>25.9</u>	3	1.4	66.783
2、3ヶ月から半年程度	14	4.2	10	8.9	4	1.8	***
半年~1年程度	27	8.1	9	8.0	18	8.1	
1~3年程度	95	28.4	20	<u>17.9</u>	75	<u>33.8</u>	
3~5年程度	65	19.5	17	15.2	48	<u>21.6</u>	
5~10年	63	18.9	15	13.4	48	<u>21.6</u>	
10年以上	38	11.4	12	10.7	26	11.7	
SO <sup>2)</sup> でのボランティア経験	369						
SO経験なし	93	24.9	93	<u>80.2</u>	0	0.0	290.109
始めたばかり~1年	35	9.4	13	11.2	22	8.6	***
1~4年	139	37.3	6	5.2	133	<u>51.8</u>	
4年以上	106	28.4	4	3.4	102	39.7	

※ \*p<.05, \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

1) 欠損値があるため総数は異なる

2) SO = スペシャルオリンピックス

長いことがわかる。

SOでもボランティア経験をみると、「活動経験なし」が93人(24.9%)、活動経験初期にあたる「1年未満」が35人(9.4%)、活動経験「1年~4年」が139人(37.3%)、「4年以上」が106人(28.4%)であった。イベントスタッフの8割がはじめてとし、コーチでは9割が1年以上(91.5%)の活動経験あり、アスリート(障がい者)との交流が長いことがわかる。

## 2. 知的障がい者に対するイメージ

知的障がい者のスポーツ活動をささえるボランティアに参加する人たちの知的障がい者に対するイメージの把握を試みた。今回は知的障がい者のイメージに関する20項目のKaiser-Meyer-Olkinの

標本妥当性の測度は0.81であった。またBartlettの球面性検定では1%水準以下での有意性を確認した上で因子分析を行った。知的障がい者に対するイメージ質問項目の因子分析は、固有値スクリープロットから5因子が妥当と判断し主成分分析(バリマックス法)を行った。その際、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外し、主成分分析(バリマックス法)により因子解を求めた。その結果、累積寄与率は56.921%であった。

抽出した5因子について、第1因子は「活発な」「陽気な」「積極的な」「楽観的な」「社交的な」とする5項目で構成されている。障がい者の活動的な部分に着目した項目が抽出されたため「活動」因子とした。第2因子は「やさしい」「おだやかな」「明るい」など対象者の性格に関する項目が高い

表4 知的障がい者に対するイメージ（因子分析結果）

形容詞対質問 (SD) 項目	I	II	III	IV	V	共通性	
因子Ⅰ：「活動」							
活発な — 不活発な	0.761	0.130	0.016	-0.152	0.037	0.620	
陽気な — 陰気な	0.608	0.381	0.082	-0.281	-0.019	0.600	
消極的な — 積極的な*	-0.542	0.021	0.153	0.287	0.342	0.517	
楽観的な — 悲観的な	0.541	0.146	0.040	0.008	0.200	0.356	
社交的な — 非社交的な	0.533	0.072	0.456	0.010	-0.109	0.509	
因子Ⅱ：「性格」							
やさしい — こわい	0.057	0.841	0.165	-0.048	-0.023	0.720	
おだやかな — 攻撃的な	0.171	0.776	0.124	-0.148	0.225	0.741	
明るい — くらい	0.508	0.604	0.064	-0.083	0.009	0.634	
因子Ⅲ：「行動」							
我慢強い — あきっぱい	0.189	0.069	0.694	0.212	-0.099	0.577	
安全な — 危険な	-0.049	0.249	0.682	-0.297	0.041	0.619	
注意深い — 軽率な	-0.054	0.072	0.606	-0.145	0.053	0.399	
因子Ⅳ：「親和性」							
話しにくい — 話しやすい*	-0.038	-0.008	-0.183	0.737	0.096	0.587	
親しみにくい — 親しみやすい*	-0.161	-0.261	0.159	0.691	-0.054	0.599	
身近な — 縁遠い	0.261	0.039	0.206	-0.555	0.267	0.491	
因子Ⅴ：「感受性」							
純粋な — 不純な	-0.135	0.087	-0.147	-0.037	0.761	0.532	
不器用な — 器用な*	0.297	0.416	0.059	-0.076	0.511	0.627	
敏感な — 鈍感な	0.380	-0.121	0.392	-0.040	0.480	0.545	
累積寄与率 (%) 56.921%							

負荷量を示していたため「性格」因子とした。第3因子は「我慢強い」「安全な」「注意深い」といった対象者自身の行動への態度を表わす内容であることから「行動」因子とした。第4因子については「話しやすい」「親しみやすい」「身近な」など対象である知的障がい者との関わりについての考えを示す項目であるため「親和性」とした。第5因子は「純粋な」「敏感な」「器用な」といった知的障がい者の物事の捉え方に関する項目であることから「感受性」因子とした。

知的障がい者に対するSD法によるイメージ調査では、松村ら（2002）が因子分析の結果として、評価、親和性、性格イメージ、心理的距離、同情感といった5つの因子を抽出している。同様に

Huang（2000）が行ったアジア諸国で行った調査の分析結果でも知的障がい者への理解、心理的距離、評価、性格の4つの因子を示している。これら先行研究での質問項目は本研究の項目とは異なるものの抽出された因子は本研究の結果の因子と概ね似通った内容であり、ここでの因子分析結果は妥当なものだと判断できよう。

### 3. 知的障がい者に対する日常場面での意識と態度

知的障がい者に対する日常的な生活場面での意識分析を試みた。設定した18項目のKaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.90であった。またBartlettの球面性検定では1%水準以下での有意性を確認した上で因子分析を行い、固有値スク

表5 知的障がい者に対する日常場面での意識・態度 (因子分析結果)

質問項目	I	II	III	共通性
<b>因子Ⅰ：「実践態度」</b>				
知的障害のある人たちのためのボランティア活動に参加したい	0.776	0.124	0.060	0.622
知的障害のある人たちの施設や養護学校を訪問してみたい	0.769	0.163	-0.122	0.633
知的障害のある人が困っていたら助けてあげたい	0.694	0.191	0.271	0.592
知的障害者についての新聞、雑誌、テレビ等の記事や放送を、関心を持って見ている	0.587	0.106	0.207	0.399
普段の生活でもっと知的障害のある人と関わる機会があってもよい	0.580	0.494	0.170	0.610
知的障害のある人と一緒にスポーツ活動をしてよい	0.579	0.372	0.147	0.495
自分の子どもや兄弟が知的障害者と一緒に遊んだり学んだりすることはよいことである	0.537	0.279	0.310	0.461
知的障害のある人のことは社会全体で責任を持つべきである	0.491	0.081	0.395	0.404
<b>因子Ⅱ：「社会的受容」</b>				
知的障害者は、教育や指導によって日常生活習慣を身につけることができる	0.158	0.679	0.174	0.516
家の近くに、知的障害者の施設や養護学校ができることはかまわない	0.359	0.659	0.143	0.584
知的障害者は、できるだけ社会で一般の人と一緒に生活する方がよい	0.292	0.648	0.213	0.550
自分の子どもや兄弟が、将来、知的障害者の教育や福祉の仕事に就くことに賛成である	0.315	0.640	0.204	0.551
知的障害のある人と一緒に仕事をしてもよい	0.481	0.616	0.155	0.635
知的障害のある人はスポーツのルールを理解している	-0.053	0.573	-0.045	0.333
<b>因子Ⅲ：「否定的印象」</b>				
知的障害者のための福祉は、もっと生活にゆとりができてから考えるべきである	0.025	-0.060	0.744	0.557
知的障害のある人のことは親が責任をもてばよい	0.085	0.259	0.598	0.432
知的障害のある人は施設で生活するほうがよい	0.135	0.357	0.541	0.439
多くの知的障害者は、暴れたり物をこわしたりする乱暴な行動をする	0.246	0.097	0.541	0.362
累積寄与率 (%) 50.971%				

リープロットから3因子が妥当と判断し主成分分析(バリマックス法)を施した。その際、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を除外し再度分析した。その結果、累積寄与率は50.971%であった。

第1因子は「知的障害のある人たちのためのボランティア活動に参加したい」「知的障害のある人たちの施設や養護学校を訪問してみたい」「知的障害のある人が困っていたら助けてあげたい」などの具体的な関わり態度を表わす8項目で構成されたため「実践態度」とした。第2因子では「家の近くに、知的障がい者の施設や養護学校ができることはかまわない」「知的障がい者は、できるだけ社会で一般の人と一緒に生活する方がよい」「自分の子どもや兄弟が、将来、知的障がい者の

教育や福祉の仕事に就くことに賛成である」などの知的障がい者の社会的な位置づけに関する項目が抽出されたため「社会的受容」とした。第3因子は「知的障がい者のための福祉は、もっと生活にゆとりができてから考えるべきである」「知的障害のある人のことは親が責任をもてばよい」「知的障害のある人は施設で生活するほうがよい」といった明らかに否定的な印象を持った項目で構成されているため「否定的印象」とした。

知的障がい者に対する日常場面での意識に関する研究はいくつか行われており、4因子(生川:2007)から5因子(大谷:2002、皆川他:1985)が報告されている。これらに比べ本研究で抽出された因子数は少ないものとなっている。これは、設定した項目数が18と先行研究の26~40項目と比

べると少ないものとなっていること、加えて本研究の因子の構成項目は、これまでの研究で得られた因子と内容的に関連していることから抽出された3因子は妥当だと判断できよう。

#### 4. 知的障がい者のイメージおよび意識のボランティアの活動参与形態別比較

本研究におけるイメージ5因子の各因子得点を算出し、活動参与形態による得点の比較をした。その結果、「行動」、「感受性」の因子ではイベントスタッフが5%水準以下で、また「親和性」因子ではコーチの方が1%水準以下で、有意に高いことがあきらかになった。このことは、イベントスタッフは、アスリートのことをコーチより「我慢強く、安全で、注意深く」かつ「純粋で、器用で、敏感だ」と捉えていることがわかる。またコーチは、イベントボランティアよりも「話しやすく、親しみやすい、身近な」イメージを持っていることが明かとなった。イベントスタッフの8割がSOで初めての活動参加であり、これまでトレーニングをしてきたアスリートのイメージが色濃く

表れた結果ともいえる。

続いて、日常場面での意識・態度に関する3因子それぞれの因子得点の平均値を活動参与形態別に比較した。その結果、「実践態度」と「社会的受容」ではコーチが5%水準以下で、また「否定的印象」ではイベントスタッフが1%水準以下で、有意に高いことが明らかになった。知的障がい者との具体的な関わりの行為項目群である「実践的態度」と社会的な位置づけを示した項目群「社会的受容」ではコーチの方が高く、知的障がい者の社会参加にとって消極的かつ否定的な項目群の「否定的印象」ではイベントスタッフの方が高い結果となった。これらの結果は、接触経験の増加によって好意的・肯定的意識を持つとする先行研究の結果を追認したものといえる。つまり日常的に障がい者に接しているコーチらは一過的な関わりであるイベントスタッフより、障がい者の社会的な受容を肯定的に捉えており実践的態度をもっていることがわかる。

表6 知的障がい者に対するイメージ因子得点の比較

因子名 <sup>1)</sup>	イベントスタッフ		コーチ		t 値	p.
	平均値	SD	平均値	SD		
活動	3.47	0.55	3.38	0.47	1.45	n.s
性格	3.95	0.71	3.87	0.60	1.15	n.s
行動	<u>3.28</u>	0.62	3.14	0.54	2.18	*
親和性	3.44	0.63	<u>3.70</u>	0.64	-3.54	***
感受性	<u>3.67</u>	0.51	3.54	0.45	2.38	**

※ \*p.<.05, \*\*p.<.01 \*\*\*p.<.001

1) 因子得点の算出に際し消極的形容詞の得点は反転させた。

表7 知的障がい者に対する意識・態度因子得点の比較

因子名	イベントスタッフ		コーチ		t 値	p.
	平均値	SD	平均値	SD		
実践態度	4.28	0.46	<u>4.39</u>	0.48	-1.98	*
社会的受容	4.11	0.53	<u>4.26</u>	0.48	-2.48	*
否定的印象	<u>2.21</u>	0.70	1.94	0.59	3.44	***

※ \*p.<.05, \*\*p.<.01 \*\*\*p.<.001



5. 障がい者に対する意識に影響を及ぼすイメージ

知的障がい者に対するイメージを把握するために因子分析を行った結果、20の形容詞対質問項目から「活動」「性格」「行動」「親和性」「感受性」という5つのイメージ因子が抽出された。これらを説明変数として、知的障がい者に対する日常場面での「実践的態度」「社会的受容」および「否定的印象」の3因子のそれぞれを従属変数としてイメージとの関連について、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を施した。

実践的態度因子には、親和性 ( $\beta=0.333$   $p<.001$ )、性格 ( $\beta=0.204$   $p<.001$ )、行動 ( $\beta=0.104$   $p<.05$ ) のイメージ因子が有意 ( $F=33.541$   $p<.001$ ) に影響している。重相関係数は $R=0.432$  ( $r^2=0.214$ ) で全分散の2割を説明している。

社会的受容では、親和性 ( $\beta=0.331$   $p<.001$ )、性格 ( $\beta=0.190$   $p<.001$ )、行動 ( $\beta=0.111$   $p<.05$ ) のイメージ因子が有意 ( $F=32.273$   $p<.001$ ) に影響している。重相関係数は $R=0.456$  ( $r^2=0.208$ ) であった。

最後に、否定的印象については、親和性 ( $\beta=-0.619$   $p<.001$ ) のみのイメージ因子が採択された ( $F=230.287$   $p<.001$ )。重相関係数は $R=0.619$  ( $r^2=0.383$ ) であった。

IV. 要約

障がい者のスポーツ活動をささえるボランティアに焦点をあて、知的障がい者に対するイメージとボランティアの日常の意識や態度の構造およびその関連を活動参与形態(コーチとイベントスタッフ)別に分析し明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

サンプルの属性及び活動状況については、1) イベントスタッフでは女性が、またコーチでは男性の割合が有意に高い。2) ボランティア活動の頻度・期間ともコーチが有意に多い。3) イベントスタッフの8割が今回のイベント活動が初体験の場となっている。

知的障がい者のイメージは、4) 因子分析を施した結果、「活動」「性格」「行動」「親和性」「感受性」の5因子が抽出された。5) 活動参与形態別にみた因子得点は、「行動」「感受性」はイベントスタッフが、また「親和」はコーチの方が有意に高かった。

知的障がい者に対する日常場面での意識や態度は、6) 因子分析を施した結果、「実践態度」「社会的受容」「否定的印象」の3因子が抽出された。7) 活動参与形態別にみた因子得点は、「実践態度」

表8 障がい者に対する意識・態度に影響を及ぼすイメージ (重回帰分析・Stepwise法)

意識因子	イメージ因子	B	標準誤差	$\beta$	p.
実践態度	親和性	0.235	0.033	0.333	***
	性格	0.139	0.033	0.204	***
	行動	0.079	0.037	0.104	*
		R ( $r^2$ ) =0.4328 (0.2142)		F=33.541	***
社会的受容	親和性	0.254	0.037	0.331	***
	性格	0.141	0.036	0.190	***
	行動	0.092	0.041	0.111	*
		R ( $r^2$ ) =0.456 (0.208)		F=32.273	***
否定的印象	親和性	-0.604	0.040	-0.619	***
		R ( $r^2$ ) =0.619 (0.383)		F=230.287	***

\*\* p.<.05, \*\*\* p.<.01 \*\*\*\* p.<.001

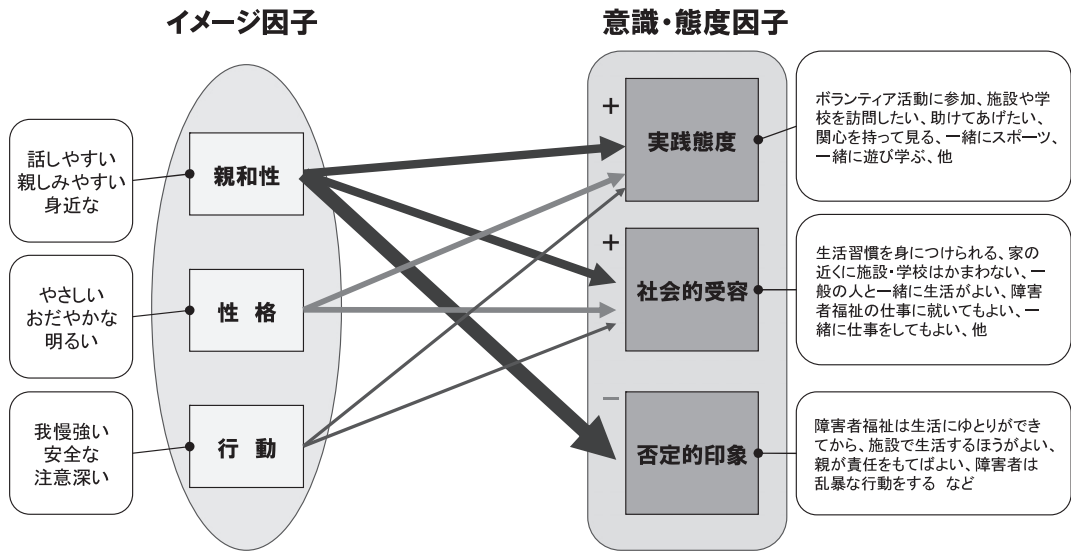


図2 障がい者に対する意識・態度に影響を及ぼすイメージ

「社会的受容」でコーチが、また「否定的印象」ではイベントスタッフの方が有意に高かった。

意識や態度の各因子に関連するイメージ因子については、8)「実践態度」と「社会的受容」には「親和性」「性格」「行動」の3因子に関連している。9)「否定的印象」には「親和性」が関連し、身近で親しみやすく話しやすいイメージを持っているものほどその印象は肯定的になる。

以上のことから、否定的な印象を与えない、身近で親しみやすく話しやすいイメージがボランティアの意識や態度に影響している。スポーツイベントに限らず、地域の交流イベントなどに積極的に参加し、日常的な活動を通して接触機会を多くし、知的障がい者自身のやさしく穏やかで明るい性格や我慢づくよく注意深く安全な行動といったイメージが、一般社会で広く受け入れられる社会的受容に繋がり、地域の人々による障がい者スポーツへの参加といったボランティア活動等への主体的参加や実践的な態度形成に関連していることが窺えた。

これらからもささえるスポーツとしての障がい者スポーツへの参加は、先行研究同様、否定的な意識や態度といった障壁を低減させることに資す

る営みとなり、より多くの人びとのボランティア活動参加を促す手段の一つとして有用であるといえる。一過的なイベントスタッフとしての関わりから日常的な関わりへと知的障がい者のイメージや意識や態度が肯定的に変化し、真の共生社会を実現するための一助となろう。

障がい者への意識や態度を規定する要因は、身近な障がい者の存在やこれまでの教育、生活環境、障がい者に対する知識などの影響も指摘されている（橋本：2002、生川：2007）。またこの度は対象者を障がい者スポーツの活動に参加したボランティアに限定したことにより、知的障がい者のイメージは全国大会に出場する選手やスポーツ活動に影響されていることも懸念される。今後、これらに配慮しつつ研究をすすめていく必要がある。

**注**

1) 知的障がい者のスポーツ活動を支援しているスペシャルオリンピックスでは、この組織内でスポーツ活動に参加する知的障がい者を「アスリート」と呼んでいる。

参考文献

- 伊藤智佳子、児島美都子、吉川かおり (2002) 『障害をもつということ』 一橋出版
- 生川善雄、安河内 幹 (1992) 「精神薄弱児 (者) に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究」『発達障害研究』13 (4), 302-309
- 生川善雄 (1995) 「精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究」『特殊教育学研究』32 (4), 11-19
- 生川善雄 (1998) 「わが国における知的障害児 (者) に対する態度研究の現状と課題」『特殊教育学研究』35 (4), 67-72
- 大谷博俊 (2001) 「交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成」『特殊教育学研究』39 (1), 17-24
- 大谷博俊 (2002) 「知的障害児 (者) に対する健常者の態度に関する研究」『特殊教育学研究』40 (2), 215-222
- 川間健之介 (1996) 「障害をもつ人に対する態度」『特殊教育学研究』34 (2), 59-68
- 川村匡由 (2006) 『ボランティア論』 ミネルヴァ書房
- 桐原宏行 (1999) 「ボランティア活動の経験が障害者に対する態度に及ぼす影響」『障害理解研究』3, 15-20
- 清水直治 (1999) 「障害者に出会う、障害がある人への対応を考える」『発達障害研究』20 (4)
- スペシャルオリンピックス日本編 (2007) 『ゼネラルオリエンテーション標準テキスト』(N) スペシャルオリンピックス日本
- 全国ボランティア活動振興センター編 (2002) 『全国ボランティア活動者実態調査』 全国社会福祉協議会
- 総理府編 (1995) 『障害者白書平成7年版』 大蔵省印刷局
- 総理府編 (1996) 『障害者白書平成8年版』 大蔵省印刷局
- 田中淳子、須河内 貢 (2004) 「知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究」『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』27, 59-67
- 徳田克己 (1988) 「障害者に対する一般人の態度構造と態度変容に関する文献的研究」『東京成徳短期大学紀要』21, 63-74
- 徳田克己 (1990) 「障害児・者に対する態度を測定するための多次元の態度尺度の開発 (1)」『桐花教育研究所研究紀要』3, 21-29
- 内閣府編 (2002) 『障害者白書平成14年版』 国立印刷局
- 内閣府編 (2003) 『障害者白書平成15年版』 国立印刷局
- 内閣府編 (2008) 『障害者白書平成18年版』 東京コロー
- 内閣府 (2007) 「<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-shougai/index.html>」『障害者に関する世論調査』 内閣府ホームページ
- 中村 真、川野健治 (2002) 「精神障害者に対する偏見に関する研究」『川村学園女子大学研究紀要』13 (1), 137-149
- 橋本好市 (2002) 「障害者への偏見変容のために必要な接触体験における視点の検証」『社会福祉士 (日本社会福祉士会)』9, 79-86
- Huang su-fen (2000) 「知的障害者に対するアジア諸国の人々のイメージ」『発達障害研究』22 (2), 62-67
- 松村孝雄、横川剛毅 (2002) 「知的障害者のイメージとその規定要因」『東海大学紀要』77, 101-109
- 守屋みゆき (2003) 「看護学生の精神障害 (者) に対する理解の変化 (第1報)」『東京医科大学看護専門学校紀要』13 (1), 13-21
- 山内直人編 (2004) 『日本の寄付とボランティア』 大阪大学大学院国際公共政策研究科NPO研究情報センター
- 山口艶子、吉武久美子 (2005) 「精神障害者への偏見低減アプローチに関する研究」『長崎純心大学心理教育相談センター紀要』4, 35-42
- 横川剛毅 (2002) 知的障害者のイメージとその規定要因, キリスト教社会福祉学研究, 35, 82-88

## Abstract

### An Analysis of the Image and the Consciousness/Attitude on the Mental Retardation through Sports Volunteer for the Disabilities

Koji MATSUMOTO

Toshikazu TABIKI

The present study was designed to clarify the structure of image and consciousness/attitude on the mental retardation through sports-volunteer for the disabilities and to examine the related factors. The research questionnaire was designed for and the data was collected from 373 volunteers (coach: 257, event-staff: 116) who participated in the Special Olympics Nippon National Summer Games. These volunteers provide sport programs in their communities for individuals with mental retardation. The factor analysis was performed to identify the factor structure underlying the images and the consciousness/attitude on the mental retardation and the factor score was computed. After this, the regression analysis was performed to explain relationships between their images and consciousness/attitudes on the mental retardation.

The main results are as follows:

1. Five image factors were identified and named: 1) activity, 2) personality, 3) behavior, 4) affinity, and 5) sensitivity.
2. Three consciousness/attitude factors were identified and named: 1) personal attitude, 2) social acceptance and 3) negative impression.
3. As the results of multiple regression analysis for the effects of three factors on consciousness/attitudes on the mental retardation, 3 factors such as “activity”, “personality” and “affinity” were selected in “personal attitude” and “social acceptance”. And 1 factor such as “affinity” was selected in “negative impression”.